

金鶏山の概要

金鶏山は多くの寺院にとって、そして 12 世紀の平泉の都市計画において、ランドマークであり、中心的な位置を占めています。この山は、標高が低いために「丘」と呼ばれることも多く、標高は約 98.6 メートルで、北上川の水位から約 80 メートルの高さにあります。

歴史

円錐形をした金鶏山の形は、藤原氏の 2 代目の当主、秀衡（1122?–1187）の命により山の頂上に経塚をつくったことに由来しています。伝説によると、秀衡は経塚を一夜でつくるように命じました。近くを流れる北上川から山頂まで、人夫たちが列をなしたといいます。また、秀衡はこの山頂に黄金の雄鶏と雌鶏（金鶏山の名前と同じ）を埋め、平泉の守護を祈願したと考えられています。考古学者たちは、山頂に経塚があり、経筒が埋められていることを確認しているが、黄金の鶏の証拠は発見されていません。

場所

平泉の最も重要な 3 つの仏教寺院と浄土式庭園、すなわち毛越寺、観自在王院、無量光院もまた、金鶏山へと連なる軸に沿って建設されました。山頂は無量光院の本堂の中心がかつて立っていた場所の真西にあり、春と秋に太陽が寺院と山の両方のすぐ後ろに沈み、西方浄土を表しています。金鶏山は柳之御所の真東にあります。柳之御所は、奥州藤原氏の以前の住居であり、政治の拠点です。